

哀しいうたびと

— 西條八十 —

登坂 秀樹

西條八十といえば、歌謡曲「東京行進曲」「青い山脈」「王将」、童謡「かなりや」の作詞家として、また、生前は瀟洒しょうしや、かつ端正な風貌の有名人として、私は記憶にとどめてきた。島倉千代子のうたう「りんどう峠」が西條八十作詞と知ったのも、そう古いことではない。

本書『西條八十』（筒井清忠著・中央公論新社）

中公叢書）は、一冊を第一章「明治後期の少年八十」から、第十三章「西條八十の示すもの」まで十章にわたり、「詩人」の生涯を克明に追う形で構成されている。記憶に誤りがなければ、西條八十について、そのありのままの姿が語られた、はじめての評伝だ。

とくに、「明治後期の少年八十」からはじまり

「青年八十その悲哀―童謡『かなりや』と続き、
「詩人八十の誕生」までが、興味深い。まさにこの
部分がカッコつきで「読ませる」。そのおもしろさ
の部分をつまみ食いしてみよう。

まず、八十の父親の商売が質屋の番頭さんから転
じて「乃木ムスク」と呼ばれる有名な石鹼の製造販
売業だったこと。商売はかなり繁盛したらしく、八
十は裕福な「お坊ちゃま」だったわけだ。それが、
早稲田大学入学当時の八十に対する周辺にいた人た
ちの扱いでもあったらしい。

次に、当時詩壇人気を二分していた北原白秋と三
木露風の対立のなかで、詩作で立とうとしていた八
十が「なんとなく」露風の側についたこと。のちに
露風の評価が低下し、白秋から、萩原朔太郎、室生
犀星につながる人たちの詩壇での力が強くなること
で、八十たち露風に近かった人たちの評価も低下
し、この関係が八十の詩人としての生涯に、かなり

の不利益をもたらした可能性が高いと著者は指摘す
る。後年まで続く八十と白秋の確執、とくに白秋の
八十に対する攻撃の激しさをはじめて知った。

三番目は、大正三年不身持ちの兄が有価証券や土
地家屋の権利書を持って失踪してしまい、二十二歳
の大学生でありながら、戸籍上戸主だった八十はま
さに無一文になり、老母と弟妹をかかえ途方にくれ
る。

ちなみに、大正四年、八十は早大英文科を卒業す
るが、その卒業記念写真（本書41頁）に八十といっ
しよに、作家直木三十五の姿が見られる。『直木三
十五伝』（植村軻音著・文藝春秋）によると、この
とき直木は卒業資格がなかったが、親から金を無心
するため卒業証明が必要になり、友人に頼んで撮影
寸前すーつと卒業生の背後に仲間入りさせてもら
い、何食わぬ顔で写真に収まったという。著者の植
村軻音は直木三十五の甥にあたる。破天荒な流行作

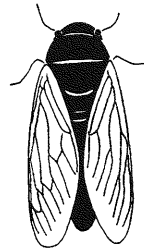
家だった三十五を「困った伯父さんだけど…」とつぶやきながらも、伯父への温かいまなざしを感じる伝記である。

本題に戻る。生活のためにわずかながら株への投資を手がけ、同時に建文館という英書専門出版社で雑誌の編集を一人でこなし、注文書籍の荷造り発送までやっていた八十のもとを、ある日（大正七年）訪れたのが、雑誌『赤い鳥』主幹鈴木三重吉だった。用件は『赤い鳥』への童謡執筆依頼だった。こうして生まれたのが『赤い鳥』誌上第二作目の「かなりや」である。この傑作童謡が生まれたきっかけは、さまざまに存在するらしいが、著者は次のような捉え方をしている。「八十は嫩子（娘）を抱いて上野東照宮の境内を徘徊していたが、ふと一つの追想が浮かんできた。十二、三歳の頃クリスマスの日には、番町教会に行ったときのことである。クリスマス・ツリーの飾られた堂内の電灯が残らず点灯されてい

たのだが、天井のてっぺんのくぼみにある電灯が一つだけ点いていなかった。その孤独な状況がな

にか異様な印象を八十に与え、翌年のクリスマスの日にも気をつけて見てみるとやはりこの一つだけが点いていなかった。少年の身に、それは多くの電灯の中で一つだけままこ扱いされているように見え、それからさらに、多くの鳥が歌い交わしている中に歌うべき歌を忘れた小鳥を見るような気持ちが沸きおこったのである。」と。

「歌を忘れたかなりや」は、本来の詩作を忘れ兜町で株価の推移に一喜一憂する八十自身であり、その詞は己を責める声でもあったのではないだろうか。しかし、歌詞四番でうたわれるように、かなりやは象牙の船と銀の櫂かで月夜の海に放たれ、再び歌を想いだすことができるとする、八十自身への慰めの声



でもあると、著者も語っている。

本書の著者、筒井清忠氏は「若き詩人西條八十」に強烈かつ温かいスポットライトを浴びせ、その後の「作詞家西條八十」をも、慈しみを含んだ筆致でたんのうさせてくれる。そのなかで、八十が大正十二年疫痢で亡くなった二女慧子を悲しみ、残した詩を紹介している。

『おそれ』

「児を貰はう」「児を貰はう」

嗚れた^{しはが}凧^{こがらし}の聲の 聞えわたる冬の夜半^{よは}

「子供はひとり先日^{こゝろ}あげました、

あれでもう宥^{なぐさ}して下さい。」

私と妻は悲しく答へて

畏れに^{かた}堅く抱き合ふ。

「児を奪^とらう」「児を奪^とらう」

税吏^{みづきとり}のやうな冷たい聲の

またしても聞えわたる夜。

哀しい「うた」である。これが後年歌謡曲で私たちを慰め、勇気づけてくれた同一人物の作品かと、一瞬心に昏い灯がともる。

しかし、以後金子みすゞとの交流をはじめとして、さまざまなエピソードを経て、昭和四年「東京行進曲」のヒットにいたる流れは、「うたの巨人」西條八十がもつとも詩人として生きた時代ではなかつたらうか。著者は豊富な資料を駆使し、八十の哀しみと耀きを、あますことなく伝えてくれる。この偉大な「うたびと」の人間性に「お隣の偉いおじさん」的親しみをおぼえると同時に、その複雑な心の襞に戸惑いをおぼえるのは、わたし一人だけだろうか。

ちなみに、詩人西條八十の復権と、作詞家西條八十の抒情性をあらためて掘り起こした本書は、第五十七回読売文学賞を受賞している。

(元フレールベル館編集局顧問)